＜特集＞

「コロナ禍での東京五輪開催は何を遺せたのか」
ー試行錯誤の１年延期期間をふり返ってー

ヨーコ　ゼッターランド[1)]

Ⅰ．はじめに

2020年3月24日．夏に開催予定だった2020東京オリンピック・パラリンピックの「開催の1年延期」が実質的に決定した日であった．COVID-19（新型コロナウイルス）のパンデミックにより，五輪史上初となった「開催延期」の決断の先には誰も経験したことのない，進める「道」すらあるのかもわからない日々が始まった．私が「開催延期決定」を知ったのはテレビのニュース速報であった．安倍晋三首相（当時）が緊張した面持ちで文書を読み上げていた映像を「ボーっと見ていた」自分がいたことに対しても，奇妙な感覚に襲われたことを覚えている．20年以上も前にアメリカで見た映画「OUTBREAK（アウトブレイク）」と同じような状況じゃないないのか？映画の世界の話ではなく，現実として未知の感染症が世界中に広がりつつある…少しずつ伝わってくる情報を整理しながら，自分の中から出てきた最初の問いかけは「この状況下で，オリンピック・パラリンピックを開催していいのだろうか？」であった．

大会延期決定の判断が下される前も，延期が決定した後も，大会組織委員会の緊急・臨時理事会が招集・開催されることはなく，3月30日にもともと予定されていた第36回通常理事会で大会延期決定の報告と共に，決議がなされ，今後の対応について検討していくことが伝えられた．ここからは私自身の葛藤の日々がスタートした．

Ⅱ．オリンピックへの憧れ

私は小学校5年生の時にバレーボールの魅力にとりつかれ，オリンピックを目指す決心をした．バレーボールが初めて正式競技に採用されたのが1964年の東京オリンピックである．「東洋の魔女」と呼ばれた日本代表が金メダルを獲得し，そのチームの主将を務めた故・河西（現姓：中村）昌枝さんからオリンピック出場時の話を聞かせていただいたところから「世界一」という言葉が，私にとっては未知の世界への憧れ，そして目標へとなっていった．

亡くなった私の母もバレーボール選手であった．1964年の東京オリンピック前に第一線から退いたが，1960年にブラジルのリオデジャネイロで開催された第3回バレーボール世界選手権に河西さんらと共に出場し，銀メダルを獲得した．当時の日本のバレーボールは，まだまだ9人制が盛んであったが，世界の主流は6人制．日本は第二次世界大戦の敗戦により，アメリカの占領下におかれ，当然のことながら経済的なことも含めて海外への渡航もままならない時代であった．スポーツも例外ではなく，海外遠征を繰り返しながら外国チームの情報収集をすることなどは難しい状況であった．第3回世界選手権に出場するにあたり，日本女子チームは中国に遠征し，6試合を行った．9人制と6人制のルールの違いに戸惑い0勝3敗となったところで「私たちは技術では決して劣っていない．ルールを教わりながら改善していこう」とチームは奮起し，最終的には3勝3敗で日程を終えて帰国した．「世界に追いつけ．追い越せ．」が合言葉となり，1960年には銀メダル，1962年には優勝，そして1964年東京オリンピックでの優勝につながっていった．「戦後の復興期」といった社会背景と五輪で躍動する日本人選手の姿が相まって，女子バレーボールのみならず，「東京オリンピックでの金メダル獲得」の瞬間に立ち会った人たちは，「感動」だけでなく，「日本人としての誇り」を取り戻し，「世界に誇れる日本の姿」を見たのだと思う．

私は「バレーボールが楽しい！」と感じて始めたのが最大の理由だが，日本バレーボール黎明期から東京オリンピック優勝までの話を聞いていく中で，バレーボールをやることによって，自分自身のアイデンティティを見つけようとしていたのだと思う．アメリカ生まれの日本育ち，ハーフであることはいつも「中途半端」な気がしていて，強烈な帰属欲求意識が働いていたところに，オリンピックが目標としてハマったのではないかと思っている．

[1)] 日本女子体育大学健康スポーツ学科・准教授（専門：スポーツ方法学）．公益財団法人日本スポーツ協会常務理事．元女子バレーボールアメリカ代表．1992年バルセロナオリンピック・銅メダル．1996年アトランタオリンピック・7位入賞．

Ⅲ.「感動」の波及効果と「熱」の残量

1964年の東京五輪はラジオと街頭テレビの時代でありながら，その波及効果はメディアが発達した現代以上に大きかったのではないかと感じることがある．2013年秋に河西さんが亡くなるまで10年近く，ママさんバレーボールのイベントでご一緒した．日本各地を回りながら，オリンピアンがママさんと対戦するのであるが，歓迎レセプションでは市長クラスの方々も出席する．スポーツにかかわりが深くない方もいるが「東京オリンピックの時は高校生でした.」,「大学生だったので東京に見に行きました.」など，自身の思い出を河西さんに伝える様子を見ながら，1964年の東京オリンピックが日本中にもたらした効果の凄さを垣間見たような気がした.オリンピック･パラリンピックだけでなく，世界的なスポーツイベントの開催は様々な分野において技術革新をもたらすと言われている．そして情報は「与えられる時代」から「受け手が選択する時代」へと変化した．幸か不幸か，そのことは2020東京五輪で証明された形となった．COVID-19の影響で開催が1年延期になっただけでなく，史上初の「無観客開催」（感染症対策を行った上で，学校連携観戦のみ可能とした）となったため，見る側の選択肢は「映像」の一択となった．私は大会運営関係者として会場で観戦する機会があったため，無観客の会場をいくつか回ったのだが，率直な感想を述べれば観客の熱気が感じられない会場は実に淋しいものであった．アスリート達の力強いパフォーマンスやボランティアの方々の一所懸命な取り組み，大会関係者皆さんの運営努力は素晴らしいものがあったことは言うまでもない．しかしながら大会開催を一年延期したにもかかわらず，通常通りの開催形式が叶わないままの開催となった．私見ではあるが,「今，できることは何かを考え，最善を尽くす」とはいえ，果たしてこの開催方法で本当に良かったのかという思いが残る．

技術的な側面から見れば「見るスポーツとしてのレガシー」は成功と言えるかもしれない．映像を通して見るアスリートの表情の変化や，細やかなスキルをクローズアップしてスローでの再生など，会場では決して見ることのできない部分をメディアが全世界に向けて即時に配信した．その好効果はオリンピックよりもパラリンピックに大きく表れたことが，その後の反響からうかがい知ることができる.「初めて競技のことを知った．おもしろかった.」といった感想が多く寄せられるようになり，各競技団体には「パラスポーツの体験会を実施したい.」といった問い合わせが増加した．各競技においてメダルの獲得が相次ぎ，好成績を収めただけでなく，パラアスリート達が見せた「人のもつ可能性」に感動し，魅せられた人が多かったからだと考えられる．映像を通して伝える，その情報を受取ることの良さは否定しない．しかしながら，会場で「その瞬間」に立ち会ったときに生まれる「肌で感じる熱量」は，視覚情報から得る熱量の比ではない．アスリート達もまた同じである．一瞬一瞬を「誰かと共有している」と実感できるのは，会場内において自分たちが観客の姿を目にするからである．メディアを通じて，その向こうに「受け手」がいることを改めて実感するのは，すべてが終わってからである．

私はメディアを通じて得た熱量と比べて，会場で感じた熱量はより大きく，かつ冷めにくい性質なのではないかといつも思う.「2020東京五輪」がどのように，そしてどれだけ人々の記憶に残ったのかは，後々明らかになってくるだろう．

Ⅳ．スポーツが持つ「力」

1964年の東京五輪から半世紀が過ぎ，日本社会も人々の価値観も大きな変化を遂げた．初めて五輪のホスト国（都市）となった前回は，まさに「挙国一致」を感じさせる五輪であった，と聞いたことがある．戦争で人々が傷つき，困難な状況から立ち直っていく中で,「スポーツのもつ力」は，有形無形に，そしてそれは自然な形で大きな役割を果たしたのだと言えよう．しかしながら2020年東京五輪は通常開催が決定していたところに「有事＝COVID-19パンデミック」が発生し,「スポーツの持つ力」はその脅威を前にして，とても無力に思えたのである.「1年の開催延期」が決定した後もCOVID-19の状況は悪化の一途をたどり，それに比例して世論は「五輪の中止」「再延期」の声が高まっていった．五輪開催都市は契約上,「大会開催権の返上」は可能であるが,「大会中止の決定権」は国際オリンピック委員会（IOC）にある．開催側のスタンスとしては,「大会の中止（開催権の返上），再延期は無い」として,2021年7月23日の開幕に向けて，再びカウントダウンが始まった．

私はオリンピアンとして，アスリートとして多くの人に支えられ，取り組んできたことを発揮する場所と機会を与えてもらった．それはとても貴重で尊いことであるということを知ったと同時に，アスリートやスポーツそのものは社会の中で活かされ，輝くものであると気付かされた．

「大会の中止」や「再延期」を唱えた世論も,「アスリートの存在意義」や「スポーツの持つ力や価値」を否定するものではなかったと思う．パンデミックの状況を鑑み，苦境に立たされている人々や，弱者に寄り添う姿勢を見せない傲慢さに対して，怒りの矛先が向けられたのだと思う．大会運営を担った組織委員会からの情報発信のタイミングも後手に回ることが多く，情報を伝える方法やメッセージの内容も，受け手にとっては不明瞭でわかりづらい言葉が多く並んだことも,その「怒り」を助長した一因だったと思っている．

1年延期の後，東京五輪が開催され，ひとまず大事無く，閉幕したのであるが，今後の五輪開催の在り方が大きく問われることになった大会であった．

Ⅴ.「Beyond 2020」を考える

1. 都市開催について

COVID-19パンデミックがいつ収束するのか，その光明はまだぼんやりとしていて弱い．この状況下での五輪開催は未だ是非が問われているが，開催したことによって，「スポーツの持つ価値が下がった」ということはなく，アスリート達もその真価を発揮した．しかしながら今後，五輪を開催していくにあたり，真価が問われることになったのがIOCの存在ではないだろうか．

東京五輪の開催が決定し，大会組織委員会の理事を拝命してから約7年携わらせていただいたが，私は未だにIOCの全体像がわからない．とくにそのことを強く感じたのが，一連の開催延期決定から大会終了までのプロセスにおいてであった．開催都市の東京が，パンデミックという有事下での開催の是非を議論している中で，どこか「高みの見物」の感が否めなかったのである．国内外のメディアも「五輪開催と金の問題」についてより一層厳しい追及を始め，それは会長であるトーマス･バッハ氏の待遇を巡っても同様であった．実現可能だったかは別として，もし，IOCの会長であるトーマス・バッハ氏がパンデミック下での開催を考慮して，「大会期間中は選手村に滞在し，会長として大会運営の成功を見届けるべく尽力する」とでも宣言していたら「ぼったくり男爵」などと不名誉な別称はつかなかったかもしれない．

「五輪開催は開催都市に大きな負担がのしかかる」といったイメージが次第に大きくなっていることと経済不安が相まって，近年は積極的に立候補する都市も少なくなってきていることから，IOCは2024年パリ大会，2028年ロサンゼルス大会とふたつ先まで決定した．いずれも世界屈指の大都市である．

近代五輪の第1回大会は1896年アテネ大会であった．それから125年が経過したが，未だアフリカ大陸で五輪が開催されたことはない．21世紀に入ってからも4半世紀が過ぎたが，実現しそうな兆しもない．私は今回，大会を支える側として自国（地元）開催を経験したが，同時に地域の温度差も感じた．今後，五輪を開催するにあたり，議論すべきことは多々あるが，「開催地」だけをとりだしてみても，もはや「都市開催」というのはそぐわないのではないか，と思わずにはいられなかったのである．「スポーツの祭典」と言われる五輪が，世界平和や地域の発展に貢献し，経済効果をもたらす可能性があるというのであれば，それが可能となるような働きかけをしていくことが，IOCの役割として求められるようになっているのではないだろうか．時代は目まぐるしく変わっているのに，五輪だけがその在り方を変えていくことができなければ，いつしか淘汰される運命をたどることになるかもしれないと危惧している．

2.「多様性と調和」実現の難しさ

トーマス・バッハ氏は2021年7月の来日時のスピーチで「Japanese People（日本人の皆さん）」と言うはずだった箇所を「Chinese People（中国人の皆さん）」と言い間違えた．すぐに言い直したのであるが，その様子は映像として残り，世界に向けて配信されてしまった．誰にでも言い間違いはあるし，そんなに揚げ足を取らなくても…と言われそうだが，その映像を見た瞬間の私の率直な感想は「あーあ（言っちゃったよ）．」である．「思考に気をつけなさい．それはいつか言葉になるから」と説いたのは，かのマザー・テレサであるが，その通りなのだろうな，と納得した．おそらくニュースを見た多くの人が「この人にとっては日本人も中国人も『根っこはアジア人』として『ひとくくり』なのだろう．」と感じたに違いない．このような場合，言われた当事者は，普段さほど気にしていなかったりするものだが，他者から間違ったアイデンティティを認識されていると感じると反応するものである．さらにそこに「リスペクトがない」と感じられれば尚更受け入れがたいミステイクである．「多様性と調和」を理想として掲げることは素晴らしいことではあるし，それを目指し続けるべきであるが，その実現がなかなか難しいことを物語っている出来事だったと思っている．

オリンピック憲章では，いかなる種類の差別も禁止している．東京大会では大きなビジョンのひとつとして「多様性と調和」が掲げられ，「Diversity & Inclusion（ダイバーシティ&インクルージョン）」，「ジェンダー平等」のムーヴメントが推進された．五輪という世界規模のスポーツイベントを通じて，社会問題を解決していくきっかけとすることは，スポーツが果たすことができるひとつの役割であると思う．

Ⅵ. おわりに

コロナ禍での東京五輪開催は，多くの人の忍耐と尽力で大会終了までこぎつけることができた．その是非が明らかになるのはもっと後になるのかもしれない．「日本だから，東京だからこの状況下でもやり遂げることができた」との評価もあるが，それを手放しで喜ぶことには違和感を覚える．五輪の開催を「困難を乗り越えた証」としてはならない．2020年から先の五輪は，その原点に立ち返って取組みを進めることで，東京五輪の開催に初めて光が当たるのだと思う．